

ナンテール、我が哲学の地

柿並良佑（山形大学）

親譲りの出不精で小供の時から損ばかりしている。親譲り、というのがどこまで本当か知らぬが、およそのところ間違いはない。その引っ込み思案が住み慣れた市町村はおろか日本という単位も飛び越えて、異なる国へ移動することになったのだから我ながら驚いている。だいた先に留学を開始していた或る先輩からかけてもらった「機動力が低いのによくここまで来れたね」という言葉がいまだに印象深く残っているほどだ。以下に記すのは、そんな自分が2007年9月～2009年3月および2010年1月～12月の計二年半、パリ第10大学ナンテール校哲学科のMaster 2課程と博士課程に登録していた時分の話である。

旧制度時代の東京都立大学人文学部では哲学と仏文学で専攻を迷った挙句、後者を選んでそれなりにフランス語やフランス文化を学んだつもりではあるが、すでにフランスにいたり帰国していたりする大学院生の先輩方はどこか雲の上の存在で、「留学」の二字が現実味を帯びることはそうなかった。都による「大学改革」の影響もあって院進学先に選んだ「駒場」という磁場がなければ、果たしてその後のパリ行きが実現したか多分に怪しい。

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論分野という御経のような名称の所属先、ならびに隣接する科や専攻には修士の時点でいわゆる「学振」や「ブルス (bourse)」に関する情報が先輩同輩の間で交わされており、多摩の丘陵から降りてきた者にはどこか「留学せねば人にあらず」の空気を感じさせずにおかなかったが、ゆえにこそさすがに呑気な自分でもなけなしの焦燥感を覚えたのだろう、「人」になるべく情報を集めだすも本腰を入れたのは博士課程進学後、ロータリー財団某地方支部での審査を経て「国際親善奨学金」の給付が認められたのは課程2年目のことだった。同奨学金の規定では申請時に留学先として希望する機関を5箇所まで記載する必要があり、加えて同一国内では2箇所までという制限があった。フランス語圏で哲学の論文指導が受けられる大学を3カ国5都市から選ぶというのは容易なことではない。公式サイトなどを閲覧し、パリ、ストラスブール、ブリュッセル、リエージュ、ジュネーヴあたりの哲学科の所属教員を調べながら第5希望までのリストを埋めたと記憶するが、結果として、希望が集中する大都市に派遣されることは少ないと聞いていたため一応第1希望に記入しておいたナンテールへの留学が決まったときにはいささか意外な気がした。パリ第10大学のある同市は正確にはパリではないという事実が功を奏したのかもしれないが、他方、ジャン＝リュック・ナンシーとフィリップ・ラクー＝ラバルトが長らく教えていたストラスブールに留学していたらその後の自分の経験はどうなっていたのかと、すでに潰えた可能性が脳裏をかすめたことがないわけでもない。

ともあれ上記のような準備と相前後して、当然ながら未来の指導教員に直接コンタクトを取る必要があった。ナンシーの著作を主たる読解対象としつつ、哲学と神学、身体論、ハイデガー存在論における「退引」の問い……等々に関心を抱き図書館で文献を漁る過程でおそらくはDidier Franckという

研究者の著作を手にとったのだろう。連絡先を調べ、恐る恐る、拙いフランス語でメール一通を書くのにも相応の時間が必要だった頃のこと、年末に意を決して Gmail の送信ボタンをクリックしたメールに返信があったのは正月明けの4日、簡潔な数行の中に「ではパリに来て、あなたの研究について相談しよう」という文言を認めたときにはあまりの急な話に理解が及ばなかった。当時ナンテールに留学していた先輩の千葉雅也氏にも相談しつつ、「学期中ということもあり、すぐにパリには行けないのですが……」と再度文字通り恐縮しながら返信し、結果として簡単な研究計画の提出により指導を引き受けてもらえることになったときには、すでに気力の大半を消耗していた。

かつてはフランスの博士課程 (doctorat) に登録するためには DEA 課程を経るのが通例だったと聞くが、自分の頃には日本の博士課程学生なら直接 doctorat に登録することも可能になりつつあるという過渡期だった。ただしその場合、数年の留学では分かりやすい「成果」を示すのが難しいこともあり、DEA に相当する Master 2 課程に登録し、一年で論文を書くのも良いという助言をくださったのは、院の読書会で世話になり、先に留学していた大森晋輔氏であった¹。素直にその勧めを容れて Master 2 に登録しようとするも、ちょうどその年から DALF の提出が求められるなど書類手続きでは諸種の困難を極めた等々、仔細を逐一記せないほどの四方山話がある。異口同音に「フランスはすでにここから始まっている」と言われる大使館での洗礼も当然のように受け、生まれて初めてストレス由来の胃痛を覚えながらどうにか辿り着いたのは、クラマールという名の落ち着いたパリ南郊外の街だった。

パリ市内に住居を求めなかったのは、いわゆる「シテ」(パリ国際大学都市) 日本館への入居が認められなかったためで、申請者が多く先の bourse のような国費留学等が優先される結果、民間団体の奨学生は選に漏れたということであった。2007年7月当時の為替で1ユーロは150円台後半、留学中に170円程度まで上昇し死活問題となった家賃を抑えるべく日本人向け情報誌 OVNI のサイト等で探し回った挙げ句見つけたのが郊外に建つ一軒家の半地下の部屋という次第だ。大きい邸宅らしく、他の部屋に間借りしている日本出身の方が大家の代理として窓口役を務めていたが、さすがに下見せずに入居を決断することもできず、相談したところ二つ返事で現地まで足を運んでくれたのはやはりパリに留学していた渡名喜庸哲氏だった。結果として、シテ日本館に入居できなかったために電話やネット開通など諸種の手続きは自分で行う必要が出てきたが、その分、語学力を鍛える機会が増えたことも確かだ。いずれにせよ諸先輩方の尽力により渡仏一ヶ月ほど前には住居が決まり、本当に来るのかどうか危ぶまれた大学の仮登録許可証も届き、費用を抑えるためマレーシアで乗り継ぐ南回りの航空便に搭乗して、フランスへ向かうことになったのだった。

先にも触れたとおり、自分の留学時期はフランスの大学制度の改革の様々な意味での過渡期に重な

¹ 氏からはその後、食器などに加えて留学時代を共にしたというアコースティック・ギターを譲り受けた。記して再度感謝する。

っていた。かつての DEA 課程では要求されなかったと聞く「一般教養」的な必修科目が Master 2 課程にはいくつかあり、さらに言えば大学院生の修学状況を大学が把握しているか否かについて「国の監視 (vigilance) が強化されている」という話も博士課程に登録した頃に講演会で耳にした覚えがある。こうした事情が背景にあったからかどうかは分からないが、10 月初旬には予想外にきちんとした学科のオリエンテーションが開催され、出席した教員の口から「実質的に Master 2 は DEA に相当するもの」という認識が語られたときにはいささか安堵を覚えた。ただしその日、指導教員となるディディエ・フランク先生の姿は見当たらず、今後の研究について相談するため再度メールを書いて rendez-vous を取り付け、指定された日時に南郊外のクラマールから「68 年 5 月」の残り香は一見ほとんど感じられない北西郊外のナンテールへ、SNCF・メトロ・RER を乗り継いで向かったのだった。

なぜか多摩モノレールを思わせる哲学科の建物に入り、指定された bureau 428 という部屋のドアを叩くと Entrez. ——「どうぞ」なのか「入りたまえ」なのか、いまだに訳すことができない——という低い声が聞こえる。フランク先生の写真は現在ではインターネット上でわずかに見つけることができるが、当時（その後もしばらく）公開されていなかったため²、どのような人物が待ち構えているのかまったく予想もつかない。フランスではよくあることだが個人研究室がないらしく、共同で使われる狭く殺風景な事務室のような空間に入ると、果たして椅子に腰掛けていたのは眼光鋭く、威風堂々たる強面の教授で、次に覚えている言葉はわずかに Je vous écoute. (話を聞こう) のみだ。唐突さにしどろもどろとなったフランス語で、研究計画に書いたことや補足しうることを数分かけて話したのだろうか。相槌などはほとんどなく、頬杖をついたり、組んだ足をデスクにかけたりしながら聴いている先生の姿を前に、世界にたった一人取り残されたかのような恐怖に襲われたが——こうした挙措が珍しいものでないことを知るのは後になってからだ——、話を聴き終えたフランク先生が最初に口にしたのは「君はドイツ語はできるか？」という質問だった。「一応……」と答えかけた私にすかさず「ハイデガー全集の第 54 巻、パルメニデスについての議論が君の助けになってくれるだろう」と与えてくれた助言に導かれ、結局、当時フランス語訳の存在しなかったこのテキストを中心に、Master 2 論文ではハイデガーにおける「退引 (retrait/Verborgenheit)」の問題を扱うことになるのだった。最後には少し笑って「頑張りたまえ」という意味の言葉をかけてもらった気がするが、自分にとって「フランスの一番長い日」があるとしたら、実際に講義が始まる前のあの日がそうだったのだろう。

先に触れた必修授業として教養科目のうち古典ギリシア語を選択したのは教科書があった方が理解しやすいだろうという目算からのことで、また英語・ドイツ語等の外国語科目は、留学生の場合には外国人向けフランス語授業をもって替えることができた。哲学研究のための留学で目的外のことに時間を取られる歯がゆさがなかったわけではないが、振り返ってみればいずれも無駄なことではなかつ

² これには本人の意向が関係しているが今は措く。

た。

哲学の講義では、Catherine Chalier、Jean-François Balaudé といった先生方の講義を受講したが、たしか最初の学期にフランク先生が担当していたのは一般向けではなく、カントを扱うアグレガシオン対策の講義だったため、事務には指導教員の許可を得た旨を話してそちらに登録した。先述のとおり強面の先生であったが——実際、不真面目な学生に対する態度は厳しいものだった——、講義ではよく冗談やユーモラスな具体例を交えて話すので、特段分かりにくいということはない。自分の出席した哲学関連授業の受講者数は大抵 10~20 名程度なのに対して、アグレガシオン対策の講義では 100 名程度が片っ端から PC のキーボードを叩きながらノートを取っていくというスタイル——ヨーロッパにおけるノート文化の現代版——だったのをよく覚えている。指定されている『純粹理性批判』の仏訳をテキストとして、注意すべき事項や重要な箇所を緩急つけて講義していく様子は、日本で制度的に「哲学科」に所属したことのない自分にとって幾分か新鮮味をもたらすものでもあった。「君たちはカントの『論理学』を読んだか？ 読んでない？ あれは『純理』のミシュラン・ガイドだぞ」と言ってみたり、「セゴ」（セゴレーヌ・ロワイヤル）の口癖が何かを巧みに織り交ぜたジョークで学生の関心を持続させてみたりといった具合で、実は私生活でも相当に剽軽な性格であることを知ったのはしばらく経ってからのことだ。

とりわけアグレガシオン対策だからか、「君たちにとって難しい箇所は試験官にとっても難しい箇所なのだ」と口にしながら哲学的争点を解説していた姿も印象的だが、次の学期で一般向けに行われた講義が思い出深い。毎週、分厚い紙の束を教卓に置き、一枚一枚めくりながらじつくりとエマニュエル・レヴィナスのテキストを読み、解説を加えていく。難しい引用があると止まり、立ち上がって眼鏡を外し適切な具体例を探す——物や存在といった概念を説明する際にはしばしば卓上の眼鏡ケース (étui) が取り上げられる。「記号」概念を解説する際にはアウグスティヌスその他、神学の重要テキストが語んじられ、思想史と哲学的思考の交差が目の前で繰り広げられる。学生の質問にも様々な表情を見せながら答えてゆく。著書に結実することが想像に難くないあの紙束は 2008 年、*L'un-pour-l'autre. Levinas et la signification* という名のもとに上梓された（後に邦訳『他者のための一者』）。文体も手伝って、しばしば思考の凝縮された文を綴る難解な書き手と呼ばれることもあるが、私の記憶に刻まれた「教育者ディディエ・フランク」の印象は、書物から受けるそれとはだいぶ異なっている。「現象の意味は現象の中にはなく、存在の意味は存在の中にはなく、そして倫理の意味は……」と、フッサール、ハイデガー、レヴィナスの思考の核を一举に掴んでみせる講義は唯一無二の時間として流れ、そしてここに留まっている。

どうにか無事に Master 2 課程を終え、Doctorat に登録してから一年足らずで一度目の留学を終えることになったが、帰国後、学振の研究者として臨時の海外派遣制度が得られたため再度、2010 年の一年間をナンテールで過ごすことになった。フランスの大学再編期にあたり、パリ第 10 大学はパリ西大

学ナンテール＝ラ・デファンス校に名称が変わったが、無骨で殺風景な雰囲気はそのままだ。この年度にはフランク先生の講義に出席する他、前回の留学時にほとんど利用できなかった国立図書館 (BnF) に通って研究を続けるのが日課となった。

結果として私はフランク先生の指導学生の中の一人に過ぎず、それも熱心に面談を申し込むような類でもなかったため、一年後に帰国したらそれきり……ということも十分にありえただろう。実際、最後の講義の後の挨拶も淡々としたものだった。だが 2013 年、京都の大学にフランス語講師として雇われてそれなりに関西の学会や研究会に顔を出すようになって以来、かつてフランク先生の学生であった米虫正巳先生や、留学時期が重なる服部敬弘氏らとの交流の機会が増え、両氏が中心となってフランク先生を短期ないし長期にわたって招聘した折に再会、いやむしろ初めてプライベートを含めて先生と会話をするようになったのだった。先に触れた剽軽な性格を知ったのもこの時で、新米フランス語教師として授業準備に追われる合間を縫って、同志社大学で行われる先生の演習に参加し、その後の打ち上げで雑談を交えつつ続く議論に参加できたのは、遅ればせながら留学時代にやり残した課題に取り組むかのような、忘れがたい経験だ。

書き出してみると、取り留めもない挿話が次々に思い出されはする。元から知り合いだった日本の先輩や同輩を別にすれば、一番付き合いがあったのは韓国からの留学生二人で、たしか授業の合間の休憩時間にタバコ仲間として何となくアジア人同士でつるみ始めたというよくある話だ。韓国で大学教員となった二人とは今もメールや SNS を通じて時折連絡があるが、隣国にいるのにフランス語を介さなければ意思疎通ができないことに忸怩たる思いのまま今日に至っている。

大学外のことについても書くべきことは多いが、最後に一つだけ印象深いエピソードを付け足しておきたい。綺麗な身なりとは言い難い中年男性が文庫本でフロイトの仏訳を読んでいたりするパリのバスでの一幕だ。身内に障害者がいるからか、行く先々で様々な障害をもつ人々の姿が目に残ることは珍しくはなく、その日もたしか片腕に装着する杖——*canne anglaise* と呼ばれる器具——をついた男性が「(ステップのある) 前から乗車できないので、中央部のドアから乗せてくれ」と運転手に頼む場面に遭遇した。運転手は「規則だから」と無理にでも前から乗れと言って譲らず、乗客も随分粘って埒があかない。すると乗り合わせていた子連れ的女性が、「どう見ても足が悪いんだから、そこは折れろ」と運転手に抗議し始めた。何度も *C'est injuste !* あるいは *C'est pas juste !* と口にし、しまいには「あんたの名前を教えろ、RATP にも抗議する」と毅然とした態度を示している。直接自分に関わらずとも自然に *justice* の名が発せられたという事実が、一傍観者でしかいらなかった私の記憶にいく言いがたい印象を残した。当の女性が移民系であったことがその行動に関係していたかどうか即断はできないし、*C'est pas juste !* というそれ自体ありふれたフレーズは、その後も至るところで耳にすることにはなる。

思い起こせば国際ロータリーの奨学生のための集いで会食があり、障害者福祉を含めて社会保障が

話題になった際、ある会員が「この国は金持ち（つまり自分たち）には高くつく、割に合わない。だが社会を支えているのは *solidarité* なんだ」という台詞を口にした。無論、自国を誇りに思うがゆえの建前かもしれない。だが先の *justice* にせよ、この *solidarité* にせよ、社会の拠って立つところの何たるかを、それ自体は重要な運動であるデモや集会ともまた異なる小さな日常のさなか、そのつど異なる背景を持つ「個人」が発現させてみせたいくつもの場面に立ち会えたことは、必ずしも楽しいことばかりではない留学を得難い経験たらしめてくれたのだった。